

# まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第20号(平成27年11月15日)

読者数：539名(募集中)

メールアドレス：[hirosima.idea.c@urban.jp](mailto:hirosima.idea.c@urban.jp)

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

## □巻頭言

## 建築からの素敵な贈り物

グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブ共同創設者

国連訓練調査研究所(ユニタール)本部長付特別上級顧問 ナスリーン・アジミ



被爆70周年記念事業として2015年8月15日午前4時から上田宗箇流の茶会が開かれ、私も招待された。平和記念資料館と原爆ドームを結ぶ軸線上の広島平和記念公園南端の場所に、茶室に見立てた木造りの舞台を設営し、4隅から光が暗闇の天空に向けて照射され、公園全体が幽玄の世界に導かれるようであった。丹下健三氏の設計によるこの公園は厳かな雰囲気、平和記念式典にも対応しうる柔軟性や精神性を兼ね備えた素晴らしい空間だ。『一貫性と柔軟な適応性』という普遍的な建築の法則に従うものは、時の経過をも超越するということを証明している。その法則は厳島神社の不変の美の中にもある。



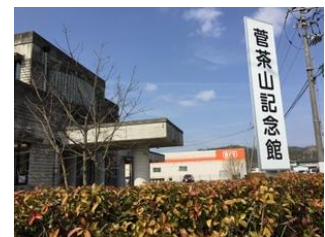
平和公園での茶会

私が初めて丹下作品に出会ったのは、東京の国連大学の会議に出席した時である。その建物を見て正直なところ、がっかりし、彼が建築界のノーベル賞とも言えるプリッカー賞に値するかどうか疑ってしまった。その後、広島を訪れ、平和記念公園と平和記念資料館で彼の建築のすごさを知った。平和記念公園は今日に至るまで、地理的にも精神的にも広島を中心であり、外国人が訪れる場所として国内のトップ10に入っている。丹下氏は建設の過程そのものがまちの復興の推進に寄与することを見抜いており、「私の目標は、人類の平和を希求するため、広島のマチのシンボルを沢山作ることであった」と1946年に書いている。彼は偉大な建築によって壮大な目的が達成されると信じていたに違いない。

50年代、60年代の日本は空爆による惨状から復興し、更に、戦後の好景気に追いつくために、速やかな建設が求められた。しかし、70年代、80年代の高度経済成長が頓挫した90年代になっても、建設活動の規制は緩く、多くの建築遺産は無視され、刹那的とも見える都市施策に安易に資金が投入された。バブルが弾けた後には、多くの良いものが失われ、膨大な量の粗悪な建築が残ったのである。

日本の自然環境は世界の中でも最も美しいと思われており、歴史や文化の豊富さ、公共交通体系の便利さ、優しい地域社会と安全性に恵まれている。しかし、建築的な視点で見れば、伝統的な美しい木造建築の技術はほとんど継承されておらず、現代建築もまともな選択肢を用意できていない。

数ヶ月前、私は尊敬する江戸時代の儒学者、菅茶山の旧邸と廉塾(国の特別史跡)のある福山を訪れた。廉塾がある神辺の古い町並みは魅力的であったが、閑散としていた。しかし、少し離れると、ショッピングモールや駐車場やファーストフード店が集まっており、そこに90年代に建てられた菅茶山記念館が居心地悪そうに建っていた。歴史と地域社会がより良い関係を保つためにも、この記念館をもっと有



菅茶山記念館

効に活用できたのではないかと、思った。

美しい海岸線を持つ尾道はもう一つの事例である。今や、海岸線の多くは腐食した金属パネルやネオンやプラスチックで覆われた大きな建物により台無しにされている。明白なゾーニングも統一したテーマや形も持たず、自然環境に対する配慮もない建造物が混在していて心が痛んだ。

三原や三次のような小さなまちでも同じ悩みを抱えている。長い歴史と美しい自然環境に恵まれているにも関わらず、まちの中は大規模なショッピングセンター、パチンコ店、広告塔、駐車場で占拠されている。こんな環境に若い人たちが移り住みたいと思うだろうか？

このことは大都市でも同様で、次々と高層建築が建てられている広島市内も例外ではない。多くの建物はパツとしないデザインで、仕上げも安っぽく、より美しい街並みを作る機会を逃しているように感じた。



神辺の町並み

\*写真は全て筆者撮影

こうした中で、輝かしい希望の光も見える。伝統と現代を融合し、自然と共生する日本建築の魅力を生かす一つのモデルが1980年代から瀬戸内海の島々で静かに進行している。

実業家の福武総一郎氏と建築家の安藤忠雄氏、西沢立衛氏、妹島和世氏たちの努力下、彼らが主催するエコに優しい島々やミュージアムやアートな場が今や世界的なアート・ツーリズムの目的地となり、日本の未来型モデルとして高く評価されている。今年4月にニューヨークの日本協会で「未来のための直島の共生：芸術・建築・自然」と題したシンポジウムが開催され、福武氏のビジョンと日本や他の国々の地方創生の成功事例が発表された。

この取り組みは、ただ単に建物に焦点を当てるのではなく、建物がその周りの自然や風景、そして歴史や文化など、長い目で見れば島民の暮らしぶりそのものにつながっていることを改めて私たちに想起させてくれる。私が訪れるときはいつも若い人たちがそこにおいて、創造的で美しい場所を作れば、若い人たちは集まってくるのだということを証明している。いつの日かこのようなまちづくりのモデルが他の田舎や地方都市にも広がっていくことを願わずにはいられない。

私はそうできると確信しているし、そのためには教育が鍵だと感じている。私自身、建築・都市学を学び始めたのが遅く、政治学という専門分野に携わっていることから多少偏見があるかもしれないが、建築の政策に影響を与えるためには、政治家をも感化できるような能力の育成が必要だと思っている。日本の建築の専門家で政治的に影響力があって、市町村の政策や県政あるいは国政に関わっている人は少ししかない。教育によって、これが変わるかもしれない。

私が子供時代を過ごした中近東では日本のバブル時代と同じように古いものは捨てられ、目新しいものが好まれる。しかし、スイスで建築を学んだ私はスイスの建築事情も知っているが、そこでは百年の単位で建築物やまちづくりを考えている。500年経った建物も、大事に維持され、修繕されて、今もなお人が住み続けている。伝統的な建築と現代の建築をうまく共生させることから生まれてくる高揚感こそが、世の中に対する建築からの素敵な贈り物なのだ。

日本における建設環境は完全に縮小傾向にある。問題は避けて通れない過程が地球に優しい循環社会を作っていくきっかけになるかどうか、また、その過程において無策に過ごした時代やバブル経済の行き過ぎを正すことができるかどうかである。それは大なる挑戦であるだけでなく、建築に携わる人たちが建築の変革の力を信じている人たちにとって素晴らしいチャンスとなるであろう。

\* 翻訳に尽力いただいた瀧口信二氏を始めメルマガ編集委員の皆さん、そしていろいろとアドバイスしてくれた友人たち（東京の大塚万砂子、出雲の並河裕子、広島の入由美）に感謝します。

\* 私は現在、被爆樹木の種子や苗木を海外に届ける活動「グリーン・レガシー・ヒロシマ」に取り組んでいます。<http://www.unitar.org/greenlegacyhiroshima> を是非参照ください。

## ○旧球場跡地について若者と意見交換

広島文化会議準備会は9月26日（土）、胡子神社3階会議室で「球場跡地になにを描く？」と題して若者との意見交換を行った。準備会（代表：竹澤雄三）は2010年設立以来、旧球場跡地を起点とした新たな市民文化創造の場『明日の広場』の形成を目指しているが、改めて若い人の意見を反映させたコンセプト作り着手し、新たな展開を図ろうとしている。



主催者側のセトラひろしまの理事長若狭利康氏よりこれまでの球場跡地利用計画の経緯の説明があり、日本建築家協会広島地域会まちづくり委員会の前岡智之氏によるコンセプトの紹介等の後、意見交換に入る。

若い人は松川友和氏（イベント企画プロデューサー）を始め、レゲエ歌手やテレビのサスケ出場者、モデル等多彩な12名が参加。球場跡地を「若者のエネルギーを爆発できる場」としていろいろなアイデアが提案された。以下、印象的な意見をまとめておく。

- ・市内育ちの人は身近な人の話や平和学習が染み付いているので、球場跡地は平和・原爆以外の利用目的がよいと思う。一方、県外から最近移住した人は原爆ドームや資料館を見てもよく分からなかったのもっと平和を考える場があってよいと思う。

**\*地元の人と外来の人には意識のギャップがあり、どちらにウエイトを置くか要検討。**

- ・アーティストが広島に来て表現できる場が少ない。ライブハウスや2000人規模のホールは多いが、700人規模のホールと数万人の収容施設やオープンスペースは不足気味。
- ・何もなければ、何にでも利用できる。必要最小限の設備を備えたフレキシブルなオープンスペースでよい。イベント企画等ソフト面を充実させれば有効活用が可能。
- ・日常的なくつろぎの場と世界的イベントのような非日常の空間は共存できる。
- ・国内外から来る人にとって原爆ドーム+αのインパクトのある魅力が欲しい。

準備会の今後の動きとしては「跡地を考える会」（仮称）を設けて引続き検討するか、他のイベントの中で情報発信しながらコンセプトをまとめ、年明け頃には広島市に要望書を提出したい意向だ。建築家のメンバーも参画しているので、具体的なイメージ作りも期待したい。

（編集委員 瀧口信二）

## ○二百年ぶりに「通り御祭礼」復活

江戸時代、広島東照宮に祀られる徳川家康公没後50年毎に行われた「通り御祭礼」が、10月10日（土）に200年ぶりに復活した。神職や武士や町役人等の時代衣装をまとった市民約550名が優雅に練り歩き、東照宮から饒津神社までの沿道に集まった約7万2千人の見物人が華やかな歴史絵巻を楽しんだ。



被爆を免れた「二百貫神輿」

京都には「祇園祭」、東京には「神田祭」、大阪には「天神祭」など、伝統的な神輿行列があるが、広島にも城下町としての風情を残す伝統的な祭りがあった。広島藩の繁栄を願う大行列で城下を挙げて楽しんでいたという。

1815年を最後に幕末の混乱や第1次・第2次世界大戦の影響で途絶えていたが、広島街の復興が進むにつれ、地元町内会や経済界から「失われた伝統文化を後世に残そう」という声上がり復活が実現した。

被爆で戦前の姿を消失した広島にとって歴史的なものを取り戻していくことは大変意義深い。祭りは平和の象徴であり、これからも周期を縮めて末永く継承されていくことを願う。



子供歌舞伎のだんじり屋台



## ○広島復興の軌跡（第15回）～被爆70年企画～

### 広島復興に旧呉海軍工廠の「ヒト」「技術」

JR呉駅傍の呉市海事歴史科学館（愛称：大和ミュージアム）は開館して10年、毎年100万人の来館者がある。愛称の「大和」が示すように、この施設のシンボルは1941年（昭和16年）に呉海軍工廠で造られた世界最大の戦艦「大和」の10分の1模型である。

これを造ったのは大手造船所ではなく、呉市音戸町の、海上自衛隊の艦艇などの修理・修繕を主に行う山本造船(株)であった。大和は全長262m、この10分の1≒26mはもはや模型ではなく実物の船、細部まで大和を再現することが求められた。特に船体全体にある微妙な丸み、木組みの甲板などは単にコンピュータによる計算では出せないものであった。精度高く再現できたのは工廠出身の職人がいたからである。大和の甲板は水はけを良くするため微妙にうねるようにカーブしている。その職人は大和で使われた台湾ヒノキの美しい木目を再現するため、タモ材を使い、4か月かけて幅15mmの板を一枚一枚手作業で張った。このほか大和は随所に美しい曲線があるが、これも工廠の「たたき出し」の技術で実現した。



戦艦「大和」の模型  
\* 写真は筆者撮影

海軍工廠は見習→職工→技手→技師の職階があり、中堅の技術者「技手」は作図、理論だけでなく現場にも精通しており、彼らが戦後、広島県はもとより日本の工業発展の大きな力になった。

1945年（昭和20年）8月終戦とともに海軍工廠も解体、当時呉工廠には5万人の従業員がいたといわれている。戦後、呉工廠はアメリカのNBC造船と播磨造船所→IHI呉工場→ジャパンマリンユナイテッド呉工場に引き継がれ今日に至っている。終戦時、従業員は引き続き呉に残った人、他の職場を求め広島県内をはじめ全国に散って行った人がいる。

東洋工業（現在のマツダ）は終戦の年、1945年12月、GHQの許可を得て三輪トラック10台を完成させ戦後のスタートを切った。当時、東洋工業の従業員は終戦時の10分の1まで減っており、生産再開とともに熟練工を大量に雇い入れた。その主力となったのが呉の工廠出身者だった。自身も工廠出身で1946年まで東洋工業に勤めた藤田京郎（デルタ工業<※>社長）はRCCの被爆40周年特別番組「瓦礫の中から～広島経済復興史～」の中で「(戦前は多くの人が広島方面から呉工廠へ勤めに行っていたが)戦後は呉の人が海軍工廠がなくなったために、広島方面で働くという形で流れが逆流したわけです。技術的な援助という形でその一端の恩恵を受けたのが、戦後の東洋工業の姿ということはできると思います。」「(工廠出身者はどのくらいの割合でおられたんですか?)さあ、数はかぞえたことはないですが、ああ、お前もか、というようなことでね、顔を合わすこと多かったわけですよ。」と“証言”している。

東洋工業以上に旧呉海軍工廠の「ヒト」と「技術」の恩恵を受け、閉鎖の危機を免れたのが三菱重工広島造船所（三菱広船）だった。

太平洋戦争の戦局急を告げる1943年（昭和18年）、三菱重工は広島市の観音、江波地区の地先埋立地60万坪（198万㎡）に東洋一の大造機工場の建設を目指して進出、工場建設と生産を同時にはじめ、船台をつくりながら軍艦をつくるという“離れ業”をおこなった。

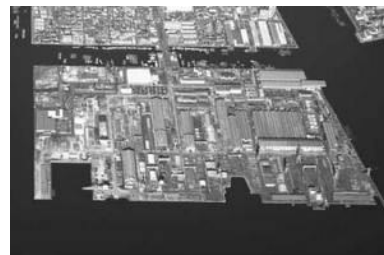
1945年8月6日、原爆投下により工場の多くが破壊された。東洋一の大工場の夢は消え、造船所内では「三菱広船の運命もこれまで」との空気が広がった。しかし、当時の所長、丹羽周夫（のちに社長になる）は戦時補償金3,000万円を引出し、復興資金に充て社員に断乎、作業を続けるよう命じた。

当時技師として働いていた日高貞蔵（1985年当時：三菱重工プラント建設相談役）はRCCの「広島経済復興史」で次のように述べている。

「みんなね、丹羽所長のもとで、一つになって復興しようじゃないか、言うならば同志的集まりになったわけですよ。残った人は工場を、広島を捨てることはできんと、空き腹を抱え、むち打ちながら立ち上がったんですね。幸い、丁度、200坪くらいの実習工場が屋根が飛ん

だくらいで残っていました。そこで、いわゆる鍋、釜っていうか、そういうものや草取り機と  
いったものを、工場の片づけをしながら作り始めた、これが戦後のスタートだったんですね。」  
これらの製品は格好は悪いが、丈夫なことは天下一品であった。

三菱広船の本格的な生産再開は終戦の年の11月、呉工廠の  
技術者約200人を雇い入れるなどして未完成のまま放置されて  
いた戦標船「第二大雲丸」の建造からだった。しかし、東京  
の三菱本社は歴史も浅く伝統機種をもたない三菱広船の閉鎖を  
検討していた。これに対して丹羽所長は人削減を図る一方で、  
日本一を誇った呉海軍工廠の技術力を導入、三菱広船のレベル  
アップを図り、この危機を乗り切ったのである。



三菱広船（現江波工場）

「海軍工廠なかりせば…」について日高は番組で次のように“証言”している。「本社で広島  
の閉鎖が論じられたのは、設備もない、技術者もろくすっぽいない、これはもう閉鎖した方が  
良いというのが本社の経営上の判断だったんですね。（丹羽所長をはじめ）三菱広船の幹部はい  
やあ、人もいますし、設備もありますよ、まあ、（呉工廠から）払い下げを受けるものを早め早  
めにリストを作って本社にアピールしとったんですよ。ですから確かに呉工廠の物的、人的遺  
産が三菱広船の閉鎖を救ったね、大きなウエイトを持っている、と言っても過言ではないと私  
は思いますね」。

戦後40年経った1985年当時、観音工場には呉工廠払い下げのドイツ製の「ナイルス旋  
盤」が現役として動いていた。

呉工廠の「ヒト」と「技術」の助けを借りて戦後のスタートを切った東洋工業と三菱広船、  
しかし、そこに大きな難関が立ちはだかった。「労働争議」「エネルギー不足」そして「賠償指  
定」だった。

連合国側の賠償の基本方針はヤルタ協定やポツダム宣言に盛り込まれており、侵略に対する  
賠償取立て、日本経済の非軍事化・民主化を進めることが明記されていた。ただ、第一次大戦  
後のドイツへの過酷な賠償取立てが良策でなかった反省から、「金銭賠償ではなく現物賠償」「年  
次賠償ではなく一回賠償」とされた。

賠償問題の具体的な指針を示したのが1945年（昭和20年）12月の「ポーレ中間報告」  
によってであった。それは●工作機械能力の半分、●陸海軍兵器廠および航空機関係設備の全  
部など7項目で、日本の重化学工業の再建を阻む、実施されれば壊滅的な打撃を受ける内容で  
あった。

戦後の日本を管理するため戦勝11か国で設けられた極東委員会は「ポーレ報告」をもとに  
具体的な指定を行っていった。その目安としたのは日本の生産水準を昭和5年～9年水準に置  
くというものであった。

三菱広船は昭和21年1月に、東洋工業はおよそ半分の施設・設備が21年8月に賠償指定  
を受けた。賠償指定を受ければ設備の撤去、事業所の閉鎖を余儀なくされることになる。

地元の経済団体、業界団体などが指定取り消しの請願運動を行う中、世界情勢も大きく変化  
してきた。米ソを軸にした東西冷戦構造の顕在化である。

こうした流れの中で、対日賠償委員のストライク（米陸軍省委嘱）は「日本を強力な工業国  
にする方が、極東の平和と繁栄に資する」報告書をだし、賠償緩和の方向が出、最終的には昭  
和24年5月、極東委員会の「マッコイ声明：平和目的の日本の生産を制限すべきでない」に  
より事実上終止符を打った。

昭和25年、朝鮮戦争勃発は在日米軍の兵站司令部が日本におかれ、大量の物資の買い付け  
が行われたことにより朝鮮特需が生まれ糸ヘン、金ヘン景気と呼ばれる好景気が招来、日本の戦  
後復興の起爆剤になったことは否めない事実である。

東洋工業は自動車生産に重点を置き、三菱広船は大型タンカーの受注に沸いた。こうして両  
社は瀬戸内工業地域における主要産業の一翼を担い、日本の戦後高度経済成長に寄与してい  
ったのである。（文中敬称略）

※デルタ工業：自動車用シートを基軸にした車内装品メーカー

（編集委員 三宅恭次）

## ○「時代を語り建築を語る会（第10回）」報告

9月25日に東広島市中央生涯学習センターで「時代を語り建築を語る実行委員会」（代表：石丸紀興）主催による第10回目の語る会が開催された。

今回の語り人は石丸紀興氏（広島諸事・地域再生研究所代表）と李明氏（岡山理科大学准教授）の二人で、広島地域における建築家（主に豊田勉之を中心に）とその活動について語られた。

### ☆ 第1部：石丸氏「地域の建築の設計者を探し見つける喜び」

・昭和61年に被爆建物の広島銀行銀山町支店の解体が始まり、建築分野の人が何も言わないことに疑問を感じていた。

・平成元年から被爆建物の調査研究と保存運動に目を向け始める。

・被爆50周年を記念して出版された「ヒロシマの被爆建造物は語る」の編集に関わり、被爆建物の設計者を探す。著名な建築家は研究されているが、地方の名もない建築家は注目されていなかった。この作業でレストハウスの設計者が増田清と判明し、他にも本川小学校、市庁舎等も設計していることが分かった。



広島合同貯蓄銀行  
(旧広銀銀山町支店)

### ☆ 第2部：李氏「豊田勉之の作品とそのデザインの特徴」

・20年来、広島近代建築とその設計者について研究。辰野金吾・長野宇平治・山田守等の著名建築家のほかに、設計者不詳であった被爆建物・広島合同貯蓄銀行本店（旧広島銀行銀山町支店）が豊田勉之の設計と判明した。

・調査の結果、呉市を拠点として活躍した建築家。東京の建築専門学校を卒業後、大正元年に呉市役所に入り、大正13年に退職し設計事務所を開設。呉銀行本店及び支店、呉商工会議所ビル等の設計・監理を行う。それらの実力が認められ、昭和11年に広島合同貯蓄銀行を設計。昭和12年から22年まで呉市役所に戻り、建築課長を務める。

・当銀行は絵葉書にも採用されるほど装飾的な様式建築として親しまれていた。

### <会場より>

味わいのある歴史的建築は現代的価値を持って都市の中で残り続けて欲しかった。

(編集委員 瀧口信二)

## □ほっとコーナー

### 『水彩画の楽しみ』

広島不動産インシダ 石田晴美

再開発後の段原で不動産業を営んでおります。  
お世話になった方やお客様に、季節の花や身近な広島の風景を水彩で描いた絵葉書を出しています。

小学校などで使うチューブの水彩絵具と違い、固形の透明水彩絵具を使います。小さなプラ容器に予め固めてある絵具を、水を付けた筆で少しずつ溶かして使います。透明なので、塗り重ねても、一度塗った下の色は隠れません。カラーセロファンを重ねるイメージです。水によって出来る、偶然のにじみがとても美しいのが面白いところです。



割と細密に描く方なので、「そっくりに描くより写真の方が喜んでもらえるのでは…」と自問自答することもあります。でも、お気に入りの色ばかり並べたホーローびきのパレットはきらきらした宝石箱のようで、蓋を開けるたび心に虹が架かりますし、外に出れば移ろう季節を見て「今日の空はセルリアンブルーよりコバルトブルーが多めだな」、「葉っぱの色がかわりはじめています。サップグリーンからオリーブグリーンの割合を増やさなくては」と、色水の調合に考えを巡らせる。

街の画材屋さんにはまるで異空間のようで、紙や筆を眺めている間は時間が経つのを忘れてしまいます。描くこと以外も、何より自分自身がこんなに楽しいのですから、これからも色々な広島を描き続けていきたいです。



## ○人物登場：大橋啓一氏（広島市文化協会副会長）

本業以外にデザイン関係の団体等の役職を多く務め、多忙の中を快く取材に応じていただく。某会議で何度か顔を合わせていたが、予想通り温厚で気さくな語り口であった。

### ☆ これまでの軌跡

広島生まれ育ちの生粋の広島人。高校卒業後、東京芸大の工芸科に進み、工業デザインを専攻。大学を卒業してトヨタ車体に入社しデザインを担当していたが、3年で芸大受験の予備校時代の恩師に呼び戻される。予備校の跡を継ぐこととなり、1973年にひろしま美術研究所に改名。

1981年には姉妹校として広島芸術専門学校を設立。中四国で唯一のデザイン・美術・工芸の専門学校として文化的分野に活躍する多くの人材を育成してきたが、社会環境の変化により今年度で34年間の幕を閉じる予定。今後は予備校と趣味の講座の2本立ての美術研究所として存続。

現在、広島デザイナー協会会長等の役職を務め、市内の各分野の文化団体で構成される広島市文化協会（会長：山本一隆）の副会長である。

### ☆ 猿猴橋復元の会

職場が的場町1丁目の縁で町内会の副会長を担う。猿猴橋の戦前の優美な姿を知る人も少なくなり、橋を再生して後世に伝えたいとの思いから地元住民が2008年に「復元の会」を結成。復元にはデザインとの関連が深いこともあり、その会長に推された。

大正15年に建設された橋の親柱には照明灯と地球儀の上で羽ばたく鷲の像がブロンズ製であしらわれていた。そのデザインは大正ロマンの結実とも言われ、「広島一の橋」と讃えられていた。

当初の目標は、復元の機運を盛り上げる象徴としての親柱を建てることであったが、募金を集め3月末に完成した。その地元の盛り上がりを受けて市の被爆70周年記念事業として認められ、2015年度に橋を建造時の姿に戻すことになった。

来年3月の完成を機に、再開発中の広島駅周辺とも連携して、代々伝わっていく祭りのような行事を検討している。

### ☆ 公共の美

芸大時代の恩師小池岩太郎先生が東京で活動された「公共の色彩を考える会」の趣旨に共感。広島での公共の色彩はどうあるべきかを考える「パブリックカラー研究会」を1991年に立ち上げ、2010年からは会長を務める。

一般的に美の意識は個人的なものと思われているが、公共の美・みんなで共有する美しさも必要である。とは言え、公共が行き過ぎると単調になり面白さに欠けてしまう。まちも同様で、綺麗なだけでは人が集まらないし、人ごみや人情味のあるところでホッとする。

### ☆ これからの広島のまち

広島のまちも被爆から復興し、綺麗なまちになったけど、まだ層が薄い。気分によっていろいろなところに立ち寄れる多層なまちにしていくのが望ましい。人物も一度断ち切られたので仕方ない面もあるが、多層の人が住める環境を作っていく必要がある。

まだ広島はサラリーマン中心のまちであり、経済優先で世の中が回っているが、風流な人や面白い人が生きていけるゆとりも欲しい。そのためには歴史や文化の蓄積が求められる。

広島市文化協会もまだ幅が狭いので、広い意味での文化団体がもっと集まれば良い。各グループは各自しっかり活動しているが、大同団結となると難しい現状にある。そこをなんとか打破して文化の発信力を高めていきたい。世の中を斜めや裏側から見ると面白い。

### \*コメント\*

文化人として豊かな見識を持った方なので、まちづくりに対する文化面からのアプローチを積極的に推進してもらいたい。まちづくりと文化は表裏一体のものと思う。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）



略歴：1946年広島生まれ、1970年東京芸大卒、トヨタ車体入社、1973年ひろしま美術研究所設立、1981年広島芸術専門学校設立



復元親柱完成予想図  
（写真：大橋氏提供）

## ○ひろしま市民ひろばの提案！

2011年に広島市中央公園アイデアコンペを終え、地元の建築家として何か提案しなければという思いから、日本建築家協会中国支部広島地域会のまちづくり委員会で検討し、ひろしまのグランドデザイン「ひろしま市民ひろば」をまとめた。2013年3月に広島市に報告し、各種イベントにおける展示・発表等で多くの意見をいただき、現在見直し中である。さらに議論の場を広げるため、具体の提案内容をシリーズで紹介していきたい。

### 提案5. リバーウォークの拡充

#### 現状の課題

- ・中央公園の川沿いには環境護岸が整備され、基町ポップラ通りとして親しまれているが、河川敷と公園内は土手で遮断されている。
- ・原爆ドーム側から長寿園方面まで遊歩道としてつながっているが、橋との交差は橋下の細い通路を潜る形になっている。
- ・川沿いの建物は川に背を向けて建っており、川側からのアクセスや景観上も好ましくない。

#### 改善提案

- ・旧球場跡地エリアの市民ひろばと河川敷に開かれた緑地を一体化し、緑地帯にはオープンカフェ等の店を配置。北側の現芝生広場も親水広場を設けて河川敷とトンネル等により空間的に連結する。
- ・遊歩道と橋との交差は緑道の延長とし幅を広げる。
- ・河岸に沿って洒落た店舗を適宜配置し、雁木タクシーの船着場を整備する。河岸に人の流れを呼び込み、市民ひろばや親水広場と繋ぐことにより南北の動線が太くなり、公園とまちの一体感が生まれる。

#### 将来の姿

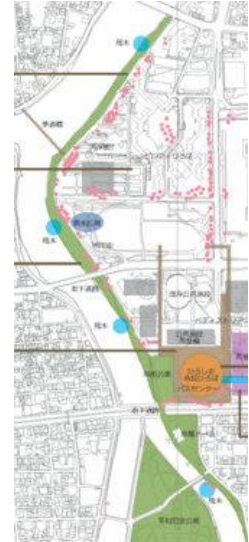
美しい環境護岸は年に数回のイベント会場として賑わっているが、日常的には人の姿は少ない。親水護岸としての役割が発揮できる環境を整える。

川沿いを歩く人が増え、気軽に河川敷に降りて寛げるし、公園側の施設やオープンスペースで何かをやっている立ち寄れる。河岸緑地のオープンカフェでは川の景色や人の賑わいやドームを眺めながら一休み。川辺では野外コンサートが開かれ、親水広場では子供たちが遊び、親たちが見守る。サラリーマンも昼休みは河岸街で食事してちょっと散策、帰宅前は気分転換でちょっと寄り道し一服する。休日には誰かがそこで演じている。

河岸全体がみんなのものとして生かされ、川の恵に感謝してみんなが綺麗に・大事に使っている。

右の写真は徳島市の新町川水際公園。多彩な催しができる広場、様々な水の形態を演出できる水空間など都市の魅力増進と中心市街地の活性化に成功した事例。広島はこの地にそのまま適用できるとは思わないが、川沿いの活気を取り戻すアイデアとして参考になる。

(JIA 広島地域会まちづくり委員会メンバー 瀧口信二)



リバーウォーク  
(川沿いの緑地帯)



河岸のイメージ図



徳島市の新町川

## ○こまちなみシリーズ⑧

金沢市はまちの歴史を色濃く残した、ちょっとした町並みを「こまちなみ」として守り、育てるまちづくりを進めている。これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介してきたが、今号から市内周辺から広島県内に対象を広げていく。



## 西条の酒蔵通り

中国セントラルコンサルタント 桧山渉

JR 西条駅の南側、線路と平行して東西にのびる街道が、酒蔵通りである。看板代わりの赤い煉瓦煙突や、白い漆喰と黒い海鼠壁とのコントラストが美しい土蔵造りの酒蔵群が残っている。

東広島市西条は、灘・伏見と並び称される日本有数の酒処である。酒蔵通りには7社の蔵元が立ち並び、酒造りの季節になるとほのかな日本酒の香りにつつまれる。

ここは、江戸時代に西条四日市と呼ばれた宿場町で、街道沿いに大きな商家や旅籠が並び、酒造りが始まった。今では四日市という地名は馴染みがないが、明治中頃までの「四日市次郎丸村」に由来している。その頃から「西条」と名を変えて、鉄道を引き込み、駅をつくり、これを機に街道沿いで酒造りが盛んになったといわれている。



亀齢酒造正面(酒蔵通り)

現在、酒蔵通りでは、ボランティアガイドによるまち歩きや、県内の大学による、酒造りの街を舞台に美術を通して盛り上げるアートイベントなど様々な活動が行われている。また酒都西条として、酒蔵通りを活用してだけでなく、西条酒(さいじょうさけ)の認定(西条産地呼称清酒認定制度)や、東広島市日本酒の普及の促進に関する条例の施行(乾杯条例)など、西条の酒蔵・酒を主とした動きが展開されている。



ART in 酒蔵ポスター

(東広島市観光協会 HP より)

そのなかでも最も大きなものが毎年10月上旬に行われる酒祭りである。2日間で20万人を超える人出でにぎわい、千銘柄の地酒が試飲できる広場や、各蔵元では趣向を凝らした酒蔵イベントが催される。そのため、酒好きの人はもちろん、酒の飲めない人、家族連れ、幅広い層が楽しめるものとなっている。また、酒蔵通りにある店舗や民家のなかには、祭りに併せて、出店したり、フリーマーケットを行う人もいる。

一方で課題もある。JR 西条駅周辺約700~800mの酒蔵通りが会場となっており、この会場に一日約12万人の来場者が集中する現況への対応策が一番の課題である。例えば、トイレの不足、泥酔者対策、廃棄物処理対策などである。特に会場近辺の住民の中には、上記の問題等で、祭り期間中は西条から離れるという人もいる。

祭りの規模が大きくなる一方で、東広島市では2009年(千代の春酒造・志和町)、2014年(賀茂輝酒造・西条町)とすでに2つの蔵元が廃業となっている。現存する7つの蔵元の並ぶ酒蔵通り、その蔵元が造る西条酒などの地域資源を活かし、今後のまちづくりを展開していくためには、祭りの来場者だけでなく、酒祭り会場近隣の住民への配慮の検討も、非常に重要だと考える。

地元住民の一人として、これからも地元に愛され誇りとされる酒蔵通り、酒祭りであり続けてほしいと願う。

### ○お知らせ:「時代を語り建築を語る会(第11回)」開催

- ・語り人: 三宅恭次氏 (RCC顧問、「瓦礫の中から~広島経済復興史~」企画・制作)
- ・テーマ: 広島戦後経済復興を語る~経営者の苦闘と戦後広島の形成~
- ・開催日: 2015年11月25日(水) 18:00~20:00
- ・会場: 合人社ウエンディひと・まちプラザ 研修室A (北棟5階)  
(旧広島市まちづくり市民交流プラザ)
- ・会費: 1000円(資料費・会場費)、学生・院生は無料
- ・参加申込の連絡先: 広島諸事・地域再生研究所  
電話/FAX: 082-223-7226 メールアドレス: [nisimar5@hotmail.com](mailto:nisimar5@hotmail.com)
- ・主催: 時代を語り建築を語る会実行委員会 (代表 石丸紀興)

## ○読者からの投稿

### 私が「かき船移設」に反対する理由（わけ）

世界遺産・原爆ドームを守る会 事務局長  
馬庭 恭子（広島市議会議員）

まさにびっくり！！かき船がなぜそこに行くの？？

河川法が改正され、川に浮かぶプレジャーボートがいっせいに吉島をはじめ係留保管施設へ。川は川としての景観を保ち、時折シラスギも岸に止まり、橋からの眺望は素晴らしいものでした。ある日、新聞記事でかき船の移設先が原爆ドームにより近くなる・・勝手ですが、移設となれば、当然、どこか下流へという思いでした。ですから、「なぜ、そこへ」というのが率直な疑問でした。国は市から要望があり、死水域ということで許可を出したという。事務的な決定であり、法的にはまちがっていないという言い分でした。（移れる死水域は残り2カ所とっていますが、3カ所あります）



被爆3団体、地元大手町2丁目、近くにある碑の設立団体が反対を表明していますが、聞く耳もたず・・。市の担当者に「市民の代表である議員である私に説明は？」と尋ねると「議案ではない、つまり市民の税金を使わないので、前もって説明はしない」ということでした。市民の財産である桜の木や景観を失うにもかかわらずです。（公園の立木は市の普通財産です）

市には景観を守るために、景観審議会があります。しかし、この移設に関しては審議会にかけられていません。水の都推進協議会に諮り、市民合意はなされたとしました。議事録を読むと副委員長は反対の論で納得がいきませんが、決をとり、了解されました。市は、「にぎわいの創出」だと説明し、世界遺産・原爆ドームの緩衝地帯という聖域で、「かきの食文化」を情報発信するという。「かきの食文化」はあの場所でもなくてもいいのではないか、猿猴川、江波などもっと吟味したらどうなのか。固定ではなく、隅田川の屋形船のように回遊にしたらどうなのかなど吟味した形跡はありません。市の平和推進担当者は、この決定に対しては蚊帳の外で、観光ビジネス担当の独走を後から知ったという苦しい状態です。

その後、発表された日本イコモス国内委員会の懸念表明は当然だと思います。まさに「国際感覚がない」そのとおりだと思います。文化庁の担当者は、観光ビジネス担当から「イコモスという団体はどういう組織か？」と電話で尋ねられた。この問題を自分たちは報道ではじめて知った」という。つまり、市は世界遺産の意味、緩衝地帯の重要性など考えておらず、前もって文化庁にも相談していないことが明白になったのです。情けないと・・東京で雪降る中、肩が落ちました。まだまだ、合点がいかないことが沢山あります。

市は法的手続きに問題がないということですが、かき船から河岸緑地の使用料の減免措置の申請も出されていないまま、工事の使用許可をしていること、中国運輸局がかき船の審査をしているのですが、「かき船は浮いているのか、浮いてはじめて船だと認識するのでは？」と問うと「市が船だというから船である」という。潜って浮いているか正確に確認していません。しかも、船は建築基準法に基づく建築物ではないので、市の消防査察は入りません。火事発生時、避難口は出入り口のみです。飲酒している客が救命胴衣をつけ、川に飛び込むのでしょうか。

沢山の論点がありますが、水面下でシナリオが描かれ、このことによって利益を得るのは誰なのか、世界遺産として今後どうあるべきか、景観とは何か、観光はどうあるべきか・・かき船はあの場所で本当にいいのか・・と第三者である裁判所に訴えることになったわけです。

\* 「世界遺産・原爆ドームを守る会」のURL <http://no-kakifuneiten.jp/>

## □編集後記

### 15ミリのまちづくり

創刊から20号目となりました。これらを束ねると15ミリほどの厚さとなります。毎回1ミリに満たない厚さの中に多くの筆者の思いが詰まっています。このメルマガは4年前に実施した被爆100年広島市中央公園アイデアコンペに端を発します。市民の参加型の提案活動では、参加が広がらなかったことから、より多くの市民の意識的参加を得るためには、地道な広報活動が必須だと考えました。その結果、次第に読者は増え続けています。何度も申しますが1000名の意識ある参加を第一目標とします。

私は被爆二世です。小さいころから被爆のことは聞かされてきました。本号で取り上げましたが、若者たちとの「広島街の印象」についての議論は、改めて考えさせられました。被爆の理解や平和への希求する認識があまり見えないのです。むしろ違和感さえあるようです。1949年7月7日、広島市の市民一人ひとりがまちづくりの役割を考えて行動した瞬間がありました。広島街のまちづくりの原点である「広島平和記念都市建設法」が市民の大多数の賛成で決定されました。このことはさらさら知られていません。

本号で取り上げるまちづくりを継承していくのは、20歳30歳代の若者たちです。これからは、読者の世代を広げることが重要だと改めて認識しました。まちづくりひろしまの読者が1000名になるための行動バクトルはここにあると考え、次の1ミリづくりに向かいます。

(編集委員 前岡智之)

**\*メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて**

**皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください!**

(投稿は500字程度以内でお願いします)

### 編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次	元中国放送役員